第一次大極殿正殿の復原工事
―黒い瓦の復原―

現在平城宮跡で復元工事が進められている第一次大極殿正殿は、入母屋造本瓦葺、重層の建築として復原されています。屋根部分の延べ面積は約2,500㎡、使用する瓦の枚数は合計約10万枚にもおよびます。この約10万枚の瓦は、どのようにつくられているのでしょうか。

平城宮跡では、現在でも古代都城構造の解明を目的とした発掘調査が継続的におこなわれており、建物の柱痕跡などの遺構や、土器や木簡などの遺物が多数出土しています。同時に瓦も大量に出土しており、平城宮跡で使用されていた瓦の様相が徐々に明らかになっています。これまでの調査と研究より、第一次大極殿に使用された瓦についても、その形状、寸法、文様などが判明していますが、実際の復原にあたっては、より精密な研究が求められました。

研究を進める上で大きな関心をよんだのは、大極殿の瓦の色でした。現在、一般的な瓦の色というと、「いぶし銀」といわれるような銀色の光沢を持つ瓦を思い浮かべる方が多いと思います。しかし、出土した瓦には銀色の光沢はなく、しっとりとした黒色を呈しているのです。さらに、この瓦を明度計で計測すると、平城宮内で出土した他の瓦に比べて、より黒いということも判明しました。

この黒という色は特別な意味を持つようです。中国の唐長安大明宮や洛陽城宮城などの宮殿遺跡からは、黒くするために表面に特別な仕上げを施して作られた瓦が出土しています。つまり、当時の中国では、意図的に黒い瓦を製作し、宮殿建築の屋根に使っていたと考えられるのです。そしておそらく、日本からやってきた遣唐使は、黒い瓦で葺かれた中国の宮殿を見て感銘を受け、日本に戻った後に、平城宮の中心建物である大極殿にその黒い屋根を導入したのでしょう。

さて、今回大極殿に使用される10万枚の瓦をつくる際、重要な意味を持つであろうこの瓦の色をも復原することが求められました。しかし、出土瓦に関するこれまでの綿密な調査でも、当時どうやってこの黒い瓦を作っていたのか明確な答えを得られませんでした。よって今回は、できる限り当時の技術を復原しつつも、現代的な製作方法を用いて、奈良時代の瓦に倣(なら)って黒く焼いたものを製作することになりました。

この時、瓦の色を復原するために考え出されたのが、瓦の表面に、鉄分の含有率の高い粘土を水で溶いて、それを塗布して焼成するという方法です。これは、粘土に含まれる鉄分が、瓦の黒味を出す要因であると考えられたためで、実際この方法で焼成すると、塗布をしない瓦よりも黒い瓦が焼きあがりました。しかし、この方法は、塗布する粘土の濃度によって黒味が変化する一方、濃度が高過ぎると、瓦に施された文様や表面調整などの細かい部分がつぶれてしまうという問題がありました。そのため濃度を変えたものを数種類用意して試作を行い、細部が表現でき、それでいて限りなく大極殿の黒い瓦に近い色となるものを選んだのです。このような試行錯誤の結果、大極殿にふさわしい黒い瓦の製作が可能になったのです。

現在、大極殿に実際に葺かれる約10万枚の瓦を製作しています。製作が完了すると、次はいよいよ瓦を葺く段階にすすみます。第一次大極殿竣工予定の2010年には、この瓦で葺かれた黒い屋根を持つ大極殿をご覧いただけることでしょう。

（都城発掘調査部　大林 潤）

乾燥した瓦に、鉄分の多い粘土を塗布する

試作された大極殿の黒い瓦